

リレー論説「子どもが拓く生活科授業の創造」第2回

気付きの質を高める生活科授業

「知を拓く」ことによる、子どもの必然性ある学習の実現」

上越教育大学大学院准教授 木村 吉彦

I はじめに

本研究機会誌『生活科の探究』75号の全国大会基調提案には、「子どもが拓く」ことの意味内容として、①知を拓く、②人間関係を拓く、③活動を拓く、そしてこれら3つを要素として④自分を拓くことにつながるかとされています。本稿は、これらのうち特に①知を拓くに焦点を当てて「子どもが拓く生活科授業」の具体的内容とその実現の手立てを明らかにすることに迫りたいと思います。このことは、次期学習指導要領改訂に向けて、生活科の大きな課題である「気付きの質を高めること」に直結し、「言葉と体験の重視」にもつながるテーマです。さらには、本誌前号(『生活科の探究 76号』)で小林先生が指摘された『経験知』から『状況に依存しない知』への移行の問題についても考えるヒントが与えられると思われれます。

II 「気付き」・「気付きの質を高める」とは

1. 生活科における「気付き」とは

平成元年版『小学校指導書 生活編』によれば、「気付き」とは、「情緒的なかかわりとしての感動や驚き」のことをさすと考えられます。しかし、それは単なる情緒の問題ではなく、むしろそこには知的認識の芽生えがみられ、そのような認識の芽生えは、後のより高度で

抽象的な認識の基礎となるものです(59頁)。とりわけ、生活科でいう知的な気付きとは、児童が自らの思いや願いをもってとりくんだ活動や体験を通して、実感を伴って得られた気付きをさします。すなわち、児童が次の活動するのに役立てたり、生かしたりしていけるような質をもった気付きのことです。それらは、将来における科学的な思考や認識、合理的な判断、そして美的、道徳的な判断の基礎になるものです(現行『小学校学習指導要領解説 生活編』62～63頁)。

このように、生活科における「気付き」とは、本来情緒的な要素を多く含んだものですが、同時にそこには知的で科学的な思考や認識、判断の芽生えを含んだものと言えます。

2. 「気付きの質を高める」とは

「気付きの質を高める」とは、体験を通して児童に考える力を付けさせること、また「知を拓く」とこととほぼ同一の意味を持つと筆者は考えます。それは、「科学的な見方・考え方の基礎の育成」にもつながり、3年生以降の学習に深くかわる思考力の基礎をなすものです。

一方、筆者は、そもそも知的ではない気付きはないとも考えています。文科省研究指定校の実践分析から、「気付きとは知的なものである」という前提のもと、生活科における気付きには「対象への気付き」と「自分自身への気付き」の二つがあると考えられます。

①対象への気付き

自分とのかかわりで働きかけ、働き返された「ひと・もの・こと」についての気付きのことです。例えば、ヤギとかかわる中で「ヤギさんの好きなもの（えさ）がわかる。」「小屋掃除ができる（箒の使い方がわかる、デッキブラシが使える。↓技能獲得につながる）」などです。このとき、見付ける・比べる・たとえるなどは、対象への気付きの質を高める上で重要な「考える力」です。

②自分自身への気付き

「わかるようになった自分」「できるようになった自分」への気付きます。各単元・小単元の振り返りで気付かせることができるはずです。例えば、「小屋掃除を友達と一緒に上手にできるようになった自分の自覚」は、子どもに自己肯定感を持たせ、生きる自信を持たせることにつながります。この生きる自信が「自立への基礎」を養います。

③気付きの共有化

気付きの質を高めるためには、（二種類の）気付きの自覚化や思考力形成に加え、「一人の気付きをみんなの気付きに」広げることが重要です。一人一人の育ちを確実に見取ることにとどまるのではなく、「協働的な学び」を実現することで、集団で学ぶ意味を持たせる必要があるのです。次の実践例で確認しましょう。

Ⅲ 実践事例から学ぶ気付きの質を高める生活科

「2年生の気付き」に特化して、具体的な子どもたちの姿や実際の言葉を紹介しながら、2年生ならではの気付きを意味付けます。

◎単元名「ぐんぐん！すくすく！わたしのおやさいさん」

（上越市立高志小学校 平成19年度2年生担任 水澤恵理子教諭）

高志小学校では、「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」という「一般目標（方向目標とも言います）」のもと、低学年担任は、生活

科をカリキュラムの中心に置いて学習を展開しています。

1. 生活科学習指導のポイント

水澤先生の考える生活科実践のポイントは次の通りです。

①自分のよさを認め、友達のよさに気付くことができるようにする

具体的には次の諸点を心がけました。（以下同様）

- ・振り返り活動を定期的に設ける。・教室背面掲示を工夫する。・活動したら書くことを継続して行う。・よさやがんばりを認め褒める。
- ・友達と一緒に活動したり遊んだりする楽しさを感じるができるようにする。・問題があつたらクラス全体で話し合い解決していくようにする。・友達のよさを見つけ伝え合う場を設ける。・協力して活動や仕事をするを大切にする。

②自分らしさを発揮し、喜んで表現できるようにする

- ・生活科を中心に子ども達が夢中になれる活動を用意する。・じつくりと対象にかかわる時間を設ける。・子どもの思いに共感する。・活動に応じて効果的な表現方法を考える。

③「わかる」「できる」が感じられるようにする

- ・一人一人の見取りをしつかりと行い個別指導に当たる。

2. 年間計画（全105時間）へ↓：活動の流れ

4月：春探検↓4月末～9月：野菜を育てよう（日常的な栽培活動）

↓6・7月：夏を味わおう（収穫・夏野菜。パティ）↓9月：あり

がとう畑さん（振り返り）↓9月～12月：秋野菜を育てよう（日常的な栽培活動）

↓10月：秋を味わおう（お芋料理）↓11月：秋探

検↓12月：ありがとう畑さん（振り返り）↓1月：収穫祭をしよう

（おでん祭り）↓1月末～3月初：野菜を育てたばく・わたし（思い

出カルタ）↓3月：ありがとう畑さん（振り返り）

3. 気付きの実際

①対象への気付き

1年次からクラス担任をしている水澤先生によれば、1年時のヤギ飼育活動においてもヤギの絵本や飼育方法の載った図鑑を教室に置いていたそうです。しかしながら、子どもたちは本を手にとって読んで内容を理解していたようですが、実際の活動に生かすことはできなかったとのことです。ヤギにとつていいことであることが分かっているも、まずは自分がやりたいこと（例えば散歩）をやつてからという場合が多かったのです。まだ自己中心性が抜けきっていないのと、文字という抽象的な情報と実生活を結びつけることは難しかったのではないかと思います。

ところが2年生になると、先生が用意しなくても、本を自分で購入したり、図書館から借り出したりして教室に置いておく子どもが現れました。そして、ただ置いておくのではなく、本を持って畑に出かけ、

野菜のすぐそばで調べる行動をとる子どもが現れたのです。日常的な栽培活動（繰り返し畑に通い、毎日野菜と対面する活動）が子ども達に強い愛着とこだわりを生み、自主的に本を手にする行動につながったと思われる。この背景には、7歳を過ぎた2年生の子ども達の抽象的思考力の発達があると思われます。本を自分で手に入れるという行動は、情緒的な側面としての気付きが高まり、愛着・こだわりさらには意欲を生み、それが行動に結びついたと思われる。この意欲は、対象への気付きの知的側面の前提になります。



気付きの知的側面での高まりは、主観的な知のレベルから、より客

観的なレベルの知にまで高まることを意味しています。例えば、A児はキュウリを収穫するに当たって、先生のいつもの指導（野菜さんの声を聴こう）を基に「キュウリさんにとつていい？って聞いたら、いいよって言うてくれたよ」とまだ10cmにも満たない実を収穫しました。その結果、「とげとげがあつて味も苦くておいしくなかった」と感想を述べています。まさしく、主観的に（自己中心的に）収穫してしまつたのです。それに対してB児は、「おじいちゃんからキュウリは長さ20cm、重さ100gが収穫の目安と聞きました。本にもそう書いてありました。」という情報をお野菜さんスピーチで紹介しました。するとA児のみならず、クラスのみんなが定規を持ち出して20cmを測り、収穫し始めました。水澤先生は30cm物差しを算



数学習に先駆けて全員に配つたそうです。このように、より客観的な尺度による収穫の目安を自分たちの力で情報収集し、かつ行動に移すことができたのです。情緒的・知的側面両方の性質を持つている生活科の気付きでは、子ども自身の行動に現れて初めて高まりがあつたと判断できます。今回の、本で調べた客観的情報を基に正しい収穫時期を特定するという活動はまさしく、情緒的・知的両面での気付きの質の高まりを示していると言えます。ところで、本で調べて分かつたことを行動に移すという子ども達の行為は何を意味するのでしょうか。生活科や総合的な学習では、体験したことや活動したことを言語化しまとめることにばかり目が向きがちです。体験をいかにして言葉に表現させるかのみ

が課題であるかのように思われていないでしょうか。しかし、この水澤学級の子も達のやっていることは、言葉による情報を見事に体験化しているとは言えないでしょうか。文字情報をもとに理解したことを、具体的な活動として体験化しているのです。つまり、主観知（経験知）と客観知（状況に依存しない知）との往復運動とは、「体験の言語（言葉）化」と「言葉の体験化」の往復も意味しているのです。ここに、「言葉と体験の重視」の内実があると筆者は考えます。

②自分自身への気付き

自分自身への気付きはどうでしょうか。1年生のとき「ヤギさんのくれたもの」と題する作文を書かせたそうですが、ヤギ乳など物の記述と「ヤギさんのことがいろいろ分かった」「ヤギさんとおはなしできた」などの自分中心の記述が多かったということです。2年生では、「夏やさいさんがくれたもの（できれば理由も）」で作文を書いてもらいました。二人の作文シートを紹介します。

夏やさいさんがくれたものはみです。

一二つ目はきもちです（なぜなら、わたしは いじっぱりでやさしいきもちはほんのすこししかないから、やさしいきもちをくれたとおもいます）。三つ目はゆうきです（なぜなら、ほんとうはわたしははずかしがりやだからゆうきをくれたとおもいます）。

夏やさいさんがくれたのはミニトマトです。二つ目はいのちです。

三つ目は力です。四つ目はこころです。やさしいこころです。

全ての子どもが理由まで付けて作文を書けたわけではないそうですが、心情面での自分の成長について気付いていること、また言葉で表現できていることに驚きます。個人差はあるものの、もう一人の自分

による自分の観察力の育ちには目を見張ります。抽象的な思考力の高まりは、対象への気付きのみならず自分自身への気付きにも明確に現れていることが読み取れます。年間計画に立ち返れば、日々の継続的活動（繰り返し）と頻繁な振り返り、そして視野を広げる情報や調べ方の情報の提供（図鑑や本を教室内に配置するなどの学習環境設定）、それらが抽象的な思考力の発達と相まって、2年生の子どもならではの気付きの質の高まりをもたらしたと考えられます。

IV おわりに

水澤実践から、気付きの質を高める生活科の実現には、例えば「おいしい野菜が食べたい」「家族と一緒に食べたい」等の明確な（栽培への）目的意識、毎日畑に通い続けることから生まれる愛着、実際に収穫ができ、褒められたという成功体験から来る成就感、が必要であると思われます。そのような諸々の体験が子どもの内面に学習の動機付け（正しい収穫時期を知りたい等）を生み出したと思われます。この内的動機付けに基づく学習が、「子どもにとって必然性のある学習」です。これこそが、「子どもが拓く生活科授業」の本質ではないでしょうか。生活科での第一の使命は、子どもに学習への探究心を生み出すことです。そのための体験の充実がますます求められています。

【引用・参考文献】

生活科教育研究会機関誌『生活科の探究』75・76号

『初等理科教育』へ農文協 2007年5・7月号、2008年1月

号

※筆者は、『初等理科教育』2007年4月号、2008年3月号まで、生活科における「気付き」についての論考を連載しました。ご参照いただければ幸いです。